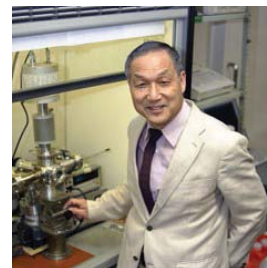


科学，社会，そして日本放射線化学会

神戸大学 中川 和道



東京電力福島第一原子力発電所の事故は科学技術に携わる我々に大きな問題を突きつけました。原子炉が制御不能に陥っていることが次第に明らかになっていくにつれ、私がまず抱いたのは、科学技術が国民の信頼を大きく裏切ってしまった、これはえらいことになったという感触と、この現実の中で放射線化学会に何ができるかという問題意識でした。

科学が市民や国民を裏切った事例は人類の歴史にも少なからず見出されます。自然の征服を意図した極めて大がかりな灌漑事業が短絡的に行われ、世界中で大規模な環境破壊に結びつき、多くの農民、市民が人為的に苦しみを味わいました。アラル海を消滅の危機に追いやったに匹敵する環境破壊の例は、東西経済圏を超えて広く見出すことができます。戦争もまたその事例でした。

上述の環境破壊事例では農学あるいは土木工学が短絡的に使用されました。今回の福島第一原子力発電所の事故では今度は原子力というハイテク工学の番でした。いろいろな学問が次々と失態を演じるさまに、私は科学技術全体が国民の信頼を大きく裏切ったと感じました。2011年科学技術白書が「・・・科学技術が人々の日常生活に甚大な影響を与え得ることが顕在化した。世界中の人々がこの現実を目の当たりにし、科学技術の持つ「光」のみならず「影」の側面を再認識することとなった。」と書きましたが、私も同じ感慨を抱いたのです。

原子力学会ではいち早く対策に出ました。情報の収集、分析、適切な助言、社会へのわかりやすい情報発信、除染への取り組みなどにとりかかったのです。では、放射線化学会は何をなすべきでしょうか？

放射線化学会が主たる活動の場としている学問分野は、放射線利用化学であります。もちろん原子炉中の水の放射線化学、高濃度金属イオン含有系の放射線化学と

いう原子炉直結的な分野も有意な重みを持ち今回の事故でも大いに活躍いただいていることは言うまでもありません。が、会員の多くの方々の研究分野は放射線利用化学しかも現状ではそれらの基礎部門を手堅く追究しているのではないのでしょうか？現時点では、放射線化学会として助言や情報発信を無理に行おうとするのは得策ではないと考えます。それぞれの持ち場できちんと仕事をすることが大切です。そのうえで、原子炉などについてこの際、きちんと勉強していくことが重要と考えます。

とは言え、国民の目から見れば我々もまた放射線に関連する科学者の一組織であります。今回のひどい事故で国民はベクレルとシーベルトという単位をあまねく知るところとなりました。リスクとベネフィットとの実現可能なつり合いの模索の中からがまん線量が決められていることなどを国民に知ってもらい、誰しもが汚染から逃れられない新たな日本での新たな暮らしのあり方を国民とともに模索していく必要があります。この観点からの具体的な研究テーマは私にはまだ見えません。しかし研究には学問に内在する興味と社会からの要請という2つの動機がありますので、社会からの要請に応えるという目もまた大切であると考えます。

科学技術に対する国民の信頼を取り戻すうえで、たこつば的な科学者の意識からの脱皮が私たちにも求められています。原子炉の事故対策は責任ある他人がきちんと分業を果たしているはずだという他人まかせの意識が指摘されています。科学者の一員として科学技術全体を把握し評価できる体質を学会としても育みたいものです。

放射線化学会にも確かな寄与が求められています。